令和六年八月度　御報恩御講拝読御書

上野殿御返事

弘安三年十二月二十七日　五十九歳

仏にやすやすとなる事の候ぞ、をしへまいらせ候はん。人のものををしふると申すは、車のおもけれども油をぬりてまわり、ふねを水にうかべてゆきやすきやうにをしへ候なり。仏になりやすき事は別のやう候はず。旱魃にかわけるものに水をあたへ、寒氷にこゞへたるものに火をあたふるがごとし。又、二つなき物を人にあたへ、命のたゆるに人のせにあふがごとし。

（御書一五二八ページ八行目～一一行目）

令和六年八月度 御報恩御講 『上野殿御返事』 （御書一五二八ページ一八行目～一一行目）

【通釈】

仏にやすやすと成る方法があるので、教えて差し上げよう。人にものを教えるとは、車が重くても（車輪に）油を塗って回りやすくし、船を水に浮かべて進みやすくなるように教えることである。仏にたやすく成る方法は特別なことではない。日照りの時、（喉の）渇いた者に水を与え、寒氷（かんひょう）に凍えた者に火を与えるようなものである。また、二つとない物を人に与え、（飢えて）命が絶えようとしている時に、人の施しに値うようなものである。

【主な語句の解説】

やすやすと…物事をするのに、苦労や障害がなく、たやすいさま。

旱魃…農業に必要な雨が長期間降らず、水涸れすること。日照り。

寒氷…寒々とした氷。寒中に張る氷。

【背景と大意】

本抄は、弘安三（一二八〇）年十二月二十七日、日蓮大聖人御年五十九歳の時に、身延の地から富士上野の地頭・南条時光に与えられたお手紙です。御真蹟（ごしんせき）は伝わっていませんが、日興上人の写本が総本山大石寺に蔵されています。

当時、数年続く飢饉の影響もあって疫病が建治三（一二七七）年春から流行し、死者が続出し翌年も収まることがなく、朝廷はその影響を断ち切るために、建治四年の二月二十九日から「弘安」へと改元しました。さらに再度の蒙古襲来が危惧（きぐ）されるという、日本国中がまさに内憂外患（ないゆうがいかん）の状況を呈していたのです。

また、南条家を取り巻く環境も厳しいものがありました。この前年には熱原法難が起こり、その余波で南条家には幕府から重税が課せられ、同時に時光は多くの公事（公共事業）にも従事しなければなりませんでした。さらに弘安三年の九月五日には、時光の弟・七郎五郎が亡くなります。これ以降、七郎五郎のことに触れられている御書は、現存するだけでも八通に及んでおり、一家の悲しみもさることながら、大聖人がいかに七郎五郎の死去を残念に思われていたか、想像に難くありません。そのような苦難の中、時光は大聖人への御供養を欠かしませんでした。

大聖人は本抄に、金色王や須達長者の故事を引かれて、時光の尊い志を称えられるとともに、法華経の行者の命をつなぐ御供養に、さらに励んでいくことこそ、成仏の直道となる旨を繰り返し教示されています。